Journal of The Human Development Research, Minamikyushu University 2019 ,Vol. 9,95-99

報告

アメリカのジョン・デューイ・シカゴ実験学校の訪問から学んだこと

酒井　喜八郎

The Report of Visit to John Dewey Laboratory School in U.S.

John Dewey, Chicago Laboratory School, Children,Thoughtful, Experience

SAKAI Kihachiro

1　はじめに

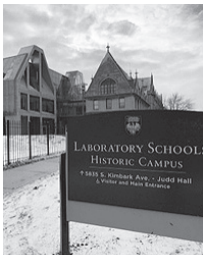
2016年7月2日、筆者は、広島大学学習システム促進研究センター（RIDLS）が主催した講演会「アメリカの教育改革と学校教育の再設計－シカゴ実験学校の21世紀型学習－」に参加した。主催者の池野（2017）は、成果として次の3点を指摘した。[1)]

① 1896年、デューイによって設立されたシカゴ大学実験学校は彼の教育についての考えを実際の教育現場で進めることだったが、その後もデューイの進歩主義教育を実践する学校として続いている。

② 現在のシカゴ大学実験学校も、進歩主義教育の理念を継承し、経験の再構成、生活と経験、特に、教科や教材と経験の相互関係を踏まえ、子ども中心の教育を推進している。

③ 教科教育もその役割を継承し知識教授とともに経験の再構成、創造を果たすものとして進められており社会科、美術科もその役割を担っている。

この時のゲストとして、Sylvie Anglinシカゴ実験学校校長とRob Ley教諭が招待されており、シカゴ実験学校の教育の特色について講演をしている。この講演については、池野（2017）の他に、阪上（2017）[2)] や中村（2017）[3)] の論文があるが、実際に現地での授業参観による考察はまだ行われていない。そして、2018年11月、アメリカのシカゴでNCSS：National Council for the Social Studies（全米社会科教育学会）の研究発表があったおりに、以前からの夢であったジョン・デューイ・シカゴ実験学校を訪問し、2人に再会し、実際に学校内の教育実践や授業を参観する貴重な体験ができたので、本稿では、シカゴ実験学校の現在の教育について報告し考察したい。



2　シカゴ実験学校の歴史

（1）　ジョン・デューイの略歴

まず、シカゴ実験学校を設立したジョン・デューイの略歴を見てみよう。ジョン・デューイ（John Dewey、1859-1952）は、アメリカ合衆国の哲学者である。1894年、新設のシカゴ大学に招かれている。シカゴ時代に経験に基づく知識理論を開発し、*Thought and its Subject-Matter*や大学の同僚との*Studies in Logical Theory*等の著書がある。

（2）　シカゴ実験学校の設立

それでは、シカゴ実験学校はどのようにして設立されたのだろうか。1896年1月、実験学校Laboratory School（のちシカゴ大学付属実験学校）をつくる。[4)]　個人住宅を借り、生徒は16人、教師は1人であった。1898年、実験室や食堂などを設置した校舎に移る。生徒は82人。1899年、関係者や生徒の保護者に、3年間の実験の報告を3度行っている。この講演の速記をもとに出版されたのが、後の教育理論の『学校と社会』（1899年）である。なお実験学校は1903年まで続き、のちデューイスクールと呼ばれる。

3　東京CICでのSylvie Anglin校長とRob Ley教諭の講演

（1）　Rob Ley教諭の講演

2016年7月2日に広島大学学習システム研究センター主催により、東京CICで行われた講演会「アメリカの教育改革と学校教育の再設計－シカゴ大学実験学校の21 世紀型学習－」において、シカゴ実験学校のRob Ley教諭の発表「小学校のクラスにおける社会科の統合」があった。[5] 社会科を教えているRob Ley教諭は、*Homework Done Right : Powerful Learning in Real-Life Situations* の本[6] について話し、また、実験学校の「統合カリキュラム」、「統合カリキュラムとしての社会科の学習内容」、そして「教室と社会・生活をつなぐ学習」の3つの視点を挙げてプレゼンした。3種類の統合カリキュラムの中でも、健全型統合は、子どもたちの社会やコミュニティにおける生活や経験をもとにした社会科の内容や考え方だけでなく、読みや計算の力の活用も求めている。社会に関する学習やよい市民の育成が、社会科の枠、時には学校での学習を超えて行われるものである。

また宿題「選挙人登録により拡大する民主主義」における学習課題は、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」を保障する内容であった。

この講演会は、大変刺激的であり、わが国でも有名なジョン・デューイにより設立された実験学校が、現在なお存続し、体験に基づくユニークな教育実践を行っていることに改めて驚かされ、関心を持つことになった。

(2)　Sylvie Anglin校長の講演 [7]

シカゴ実験学校のSylvie Anglin校長は、実験学校が、教師の自律性にゆだねられて実践が行われていることや、教師教育を重視しており、教員の研修に力を入れていることを強調された。

また、初等部では、遊びを見つけ出すことを重視しており、社会科や美術で特色のある実践があること、さらにデューイの次の言葉を引用した。

「私たちは、ある別の時代ではなく、常に自分たちが生きている時代において生活しており、一つひとつの今の経験の充実した意味を、それぞれの今において得ることは、将来、同じようになすことの準備なのです。」(ジョン・デューイ『学校と社会』より)。またAnglin校長先生によれば、実験学校では、次のような思考方式を教えている。

デザインプロセスの５段階

１　発見、２　解釈　、３　創造、 ４　実験、５　発展

さらに、Anglin校長先生は、David Gambergが「何が良い学校の定義か？」というテーマで、エデュケーションウィークという雑誌記事を書いている文章を引用して話をした。

筆者も、原文を読んでみたが、記事を書いたDavid Gambergは、ニューヨーク州ロングアイランドのthe Southold Union Free School Districtとthe Greenport Union Free School Districtの教育長（superintendent）であることがわかった。

次の3つの文章である（以下、筆者訳）。[8]

・「未来の学校は、たとえ、規模がどう、技術的な洗練性がどう、あるいは効率性がどうであればではなく、常にわたしたちの人間性の最善の質から始めるべきである。」

Schools of the future—no matter their size, technological sophistication, or cost-effectiveness—should always begin with the best qualities of our humanity.

・「最善の学習は、教師と児童がより深い理解を探究しているときに起こる。」

The best learning occurs when both teacher and student are in pursuit of a deeper understanding. It is a quest that is based on love, one that is filled with authentic, joyful, challenging, and impactful experiences. A school is a place of respect and wonder.

・「それは愛情をもとにした探究であり、総合的で、喜びがあり、挑戦しがいのあるインパクト溢れる経験で満たされている」

Anglin校長先生が、この記事について話したのは、やはり、校長自身も「よい学校とは何か？」を問い続け、伝統あるシカゴ実験学校をさらにより良い学校に発展させようとしているからではないだろうか。

4　シカゴ実験学校への訪問と統合カリキュラム実践から学ぶこと

(1) シカゴ実験学校への訪問

以下は、NCSSが始まる前に訪問したシカゴ実験学校訪問の記録である。

（写真：デューイ実験学校校長室にて（写真左がSylvie Anglin校長先生、真ん中が筆者、右が社会科教諭のRob Ley先生、校長室の奥の壁面に、デューイの肖像画が貼られている。）

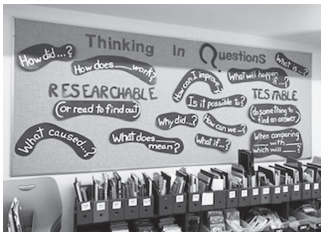
2018年11/26（月）移動日の1日目：早朝、羽田空港からシカゴ・オーヘア空港に向け出発。大雪によるシカゴの空港閉鎖のため、南に位置するインディアナポリス空港に一時避難、その後シカゴのオーヘア空港に朝到着の予定が、大幅な時間遅れで午後到着。
11/27（火）アメリカ2日目：次の日の訪問校であるシカゴ大学に隣接するジョン・デューイ・シカゴ実験学校の場所の確認と事務の方への挨拶を行う。（広いので実験学校の入口が分からない、住所も複数ある）。シカゴ大学で研究発表の準備を行う。
11/28（水）アメリカ3日目：早朝から夕方までジョン・デューイ実験学校訪問をし、授業参観と全ての校舎施設の見学をした。

前述のように、Sylvie Anglin校長先生とRob Ley先生には以前、東京の講演会でお会いし面識があり、今回シカゴのNCSS学会参加のおり、一度見学してみたいと考えていた学校訪問を快諾頂いた。Anglin校長先生に会うため、校長室をまず訪問、Ley先生の社会科授業観察、社会科授業記録データを収集、校長先生と社会科教諭 Ley先生へのインタビュー、校長先生による校舎内、運動場など各施設の見学などを行った。

（2）Rob Ley学級の授業参観と校内見学

Ley先生の学級では、子どもたちが社会科授業

で意欲的に、アクティブラーニング型のグループ学習を行っていた。丁度、シカゴで社会問題であった、子どもたちの身近な「ソーダやジュース類に税金を課すか課さないか」をテーマに、賛成か反対かの立場討論を行っていた。子どもたちの語彙が豊富で、子どもたちはしっかりと、賛成か反対か自分の立場をまず言ってから、自分の意見の根拠を述べていた。また、Ley教諭の教室掲示には、写真のように「質問において考えること」という掲示があった。「研究的」、「実験的」の2つのカテゴリーに分類し、



「どのようにしたか？」、「どのように働いたか？」、「何が原因か？」、「どんな意味があるのか？」「なぜ・・・だったか？」の問いが思考に関する緑色のカードで、「どのように証明するか？」「何が起こるか？」、「それは、可能か？」、「もし、・・・ならば、どうなるか？」、「比較してみたら？」のスキルに関する問いが青色のカードで分類して作成されていた。子どもたちが、朝の会や帰りの会、授業で討論をする場合、机から移動してこのスペースで輪になって話し合う。その空間の横の壁に掲示してあった。日頃から、子どもたちの思考をトレーニングするために、このように掲示物を工夫して、授業を行っていることがわかる。その後、Anglin校長先生が、筆者に、デューイ実験学校（初等部、中等部、高等部全て、と体育館、コンピュータ室、音楽ホール等）の校舎の施設を親切に案内してくださった。

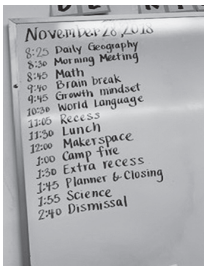
また、昼放課の時間に、「寒いけど、子どもたちがしているキャンプファイアーに行きましょう！」と言われて外に行くと、低学

年から高学年の有志の子どもたちが、理科の先生のもとで、火を起こし、保護者も参加し、マシュマロを焼いて楽しそうに食べていた。校長先生も直ぐに中に入り、野外活動の様子を見守っていた。また、他の教室では、地球儀をボールで手作りで行っていた。コンピュータ室では、プログラミングによるバスケットボールゲームの作品が置かれていた。また、音楽のオーディトリアムでは、ちょうど中等部の学年集会が行われていた。

帰りの会で、Ley学級の子どもたちの歓迎を受け、日本に関するいくつかの質問、「どこから来たの？」や「好きな食べ物は？」などの質問を受けた。これに対して、最初の問いには、ホワイトボードに日本の地図を書き、大学の位置を示した。筆者が一気に日本の地図を素早くきれいに書くのを見て、「Cool!（凄い!）」と反応があったので、「自分は社会科の先生で地理を教えていたよ。」と答えた。また、食べ物に関しては次のように答えた。

「Of course,,,、、（間をおいて）Sushi!」（もちろん、、、、お寿司だよ！）「and,,,（間をおいて）Chicago's Pizza!」（それと、、、シカゴのピザだよ！と言うと（シカゴは大きなピザで有名）、笑顔になり、「ぼくも、私も日本のお寿司食べたことあるよ！」などの歓声があがり、楽しいひとときであった。

授業を参観するだけでなく、子どもたちと交流でき訪問して良かったと思った。アメリカの子どもたちも寿司など日本の文化についても関心があることがわかった。Ley学級に折り紙と筆ペンのプレゼントをしたところ喜んでくれた。写真は、Ley学級の時間割だが、全ての授業や活動は午前8時30分から朝の会、午後2時40分に終わる。（Dismissalは解散の意味）。Recessionは、放課の意味で外で自由に遊ぶ。この日は、社会科の授業参観の他に、校舎の施設見学、昼にキャンプファイアー見学、中等部の国語の授業参観など、結局、朝から午後3時近くまで、終日、この実験学校で過ごしたが、学校全体で、子どもたちの主体的な学びや体験活動を重視しており、初等部・中等部・高等部で、様々な授業や教育活動が行われていて子どもたちが意欲的に学習している姿に感心した。帰る時にAnglin校長から、「また、是非シカゴ実験学校に来て下さい！」と言われ、思慮（Thoughtful）、責任（Responsible）、親切（Be kind）の3つの言葉が書かれた学校の記念品を頂いた。



5　おわりに

シカゴ実験学校から学んだことは以下の3点である。

① 実践知の重視と統合型カリキュラム
② 考えることや討論、体験を重視した授業づくりと教師の裁量に任された多様な教育実践
③ 話し合いのスペース（空間）の確保や学習スタイルや学習成果を示す掲示物の工夫

まだ、学んだことは多くあるが、紙数の関係で割愛する。今回、実際にシカゴ実験学校へ出かけてみて、筆者の関心である主体的・対話的な学びとアクティブラーニング、体験活動と社会認識の関連などについて、改めて考えさせられた。日本の新学習指導要領でも強調されている主体的・対話的な学びやコンピテンシー・ベースの育成は、アメリカでも強調され多様な教育実践が行われている。[9]

シカゴ実験学校のホームページにはジョンデューイの次の言葉がある。[10]

“Education is not preparation for life;
education is life itself.”
–John Dewey, educator and Laboratory Schools founder

今後は、さらに、社会科授業はもちろん、シカゴ実験学校の教師研修がどのように行われているのかについても、機会があれば、再度訪問し、さらに多くの教育実践を見て、詳しく調べ、比較研究をしてみたい、また研究交流もしていきたいと考えている。

謝辞

今回のシカゴ実験学校の訪問では、シカゴ・デューイ実験学校のSylvie Anglin校長先生、また、授業参観にあたっては小学校4年生担任Rob Ley先生にお世話になった。ここに感謝したい。

尚、本研究は、学園奨励研究の1部である。今回の訪問の社会科授業参観で得たデータの授業記録は、稿を改め分析しいずれ論文化したい。

＜註＞

1） 池野範男（2017）「シカゴ大学実験学校の講演会：アメリカの教育改革と学校教育の再設計」『学習システム研究』(5) 広島大学院学習システム促進研究センター，pp.113－114.

2） *Ibid*. pp.125－132.
阪上弘彬（2017）「初等社会科における社会統合カリキュラム：米国・シカゴ大学実験学校レイ教諭による実践をもとに」

3） *Ibid*. pp.115－123.
中村和世（2017）「シカゴ大学実験学校におけるデューイ教育思想の継承と今日的意義：シルビー・アングリン校長による講演を踏まえて」

4） 実験学校とは、新しい教育の理論、内容、方法を研究し実験するために設けられた学校のことである。

5） ロブ・レイ（2017）「小学校のクラスにおける社会科の統合」発表資料

6） Janet Alleman（ミシガン州立大学）や Rob Ley 教諭らの社会科のアクティブラーニングのための社会問題を家族と話し合う宿題について述べた著書。
Janet Alleman, Robert Ley *et al.*（2017）*Homework Done Right: Powerful Learning in Real-Life Situations* , Skyhorse N.Y. P.216.

7） シルビー・アングリン（2017）（シカゴ大学実験学校・小学校長）「小学校における21世紀型学習を創る好奇心、創造性、自信、学問」発表資料

8） *Education Week* の雑誌記事の3つの文は、改めて原文を筆者が訳出した。雑誌記事は、David Gamberg, ‘What Defines a Good School?’ *Education Week* March 29 2016, Vol.35, Issue 26, p.28
https://www.edweek.org/ew/articles/2016/03/30/what-defines-a-good-school.html
（2019年2月6日閲覧確認）

9） ATC21s（21世紀型学力）の国々は日本と同様にコンピテンシーベースの学力育成の教育を近年重視している。
詳しくは、酒井（2014、2016）のシンガポールの教育、酒井（2015）のオーストラリアの教育、酒井（2018）のフィンランドの教育のそれぞれの社会系教育に関する論文を参照のこと。

10） シカゴ実験学校のホームページは以下参照。
http://www.ucls.uchicago.edu/uploaded/admissions/Lab_viewbook_spreads.pdf?1468942014016
（2019年2月6日閲覧確認）